



世説美事合編

1279  
1



門一第18卷  
1275  
卷1/25

曲亭主人著

# 近世說美少年錄

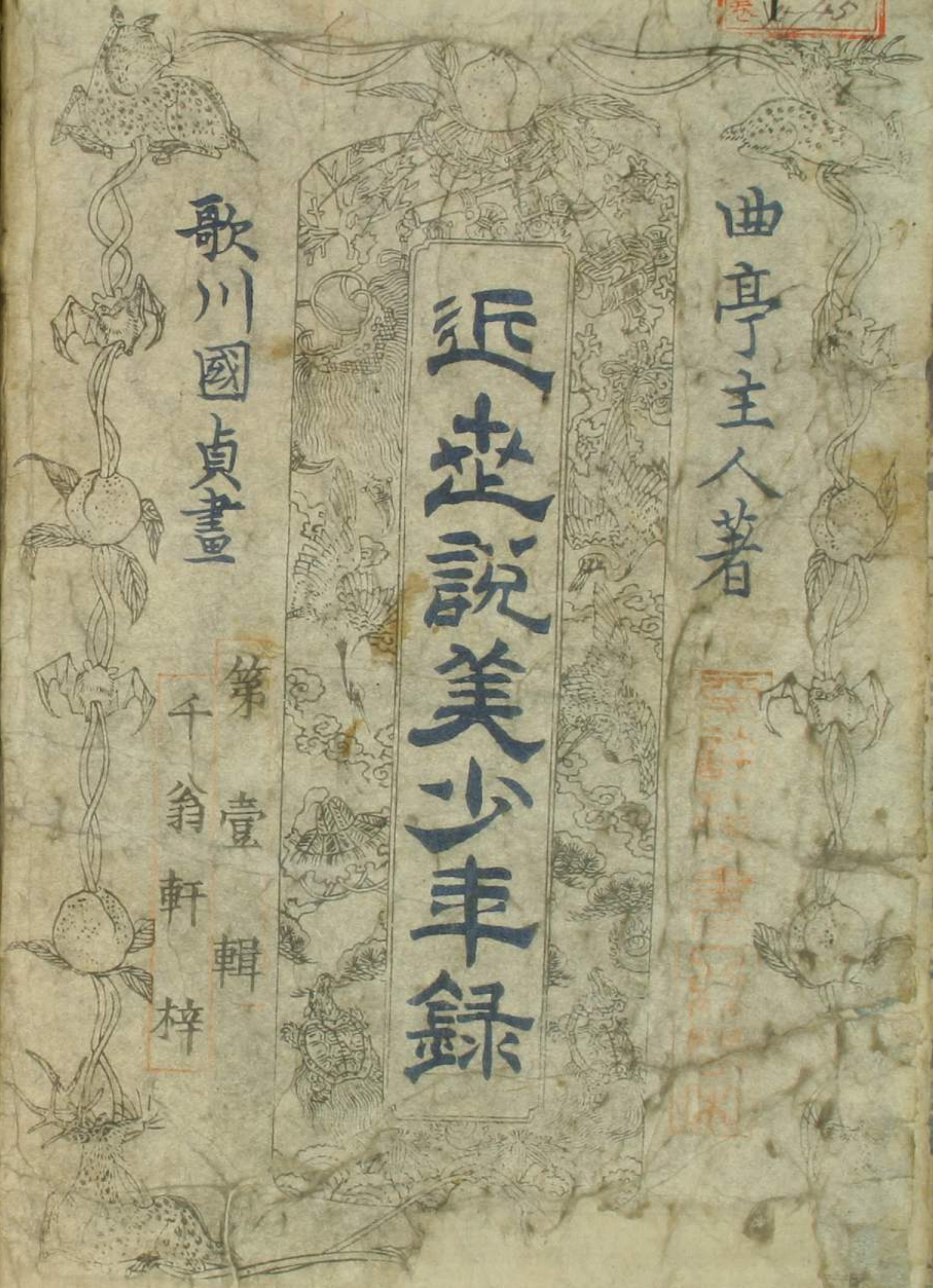
歌川國貞畫

第一卷  
千翁軒輯梓

村田

近世說美少年錄第一輯序

將帥無常任。初出世也。乘風雲之會。而得其主。則佐順討逆。功成而名爵丕顯。子孫承嗣。而為一方屏翰者。為不尠矣。昔者大內氏為其先。出於百濟國王東明王餘璋第三子琳聖。天朝推位一十九年。琳聖避唐兵之亂。投嶺防州佐波郡多多良濱。回賜姓多多良王子七世孫。多多良正恒。稱



至。而。至。朱雀朝。有大內藤根者。藤根。小。五。孫。備。盛。壽。永。役。從。東。軍。而。有。功。焉。曰。任。大。內。外。當。時。與。子。葉。三。浦。富。樞。俱。謂。之。元。功。西。人。既。為。榮。備。盛。玄。孫。周。防。權。不。重。弘。補。於。六。波。羅。評。定。衆。重。弘。孫。弘。立。法。名。道。階。自。元。弘。建。武。擾。亂。從。事。足。利。氏。依。功。為。周。長。石。三。州。守。弘。立。生。義。弘。義。弘。武。畧。過。父。祖。矣。明。德。役。與。山。名。氏。清。戰。獲。其。首。相。國。道。義。公。嘉。之。賜。豐。前。及。紀。伊。和。泉。與。舊。封。三。洲。併。管。領。六。州。

盛名自是盛也。應永六年。義弘以佐界反。將罷華洛軍。敗見誅。其子持世遁去。隱于周防山口。相國則削豐紀泉三州。與之於有功者。且使義弘弟盛見繼其家。持立亦會。散數年之後。盛見請持立為嗣。相國。世生教弘。教弘生政弘。政弘生義。佐將軍慧林公。還於京師。其忠且不。霸一般。由茲除三位補管領。時為周。藝石及山城七州守。在京八年。財用不。

而歸周防。又數年而薨。義興生義隆。義隆弱。不思民之憂苦。豪奢無節。訖富貴自負。於是為其臣陶晴賢所殺。國竟亡矣。予一日繕軍記。讀而至義隆滅亡條下。未嘗掩卷不浩嘆也。蓋義隆雖暗弱。然非有桀紂之惡。且封疆之廣。豈無一箇比干耶。而其身殂于斧鉞。七州瓦解。所以然者何也。位高德寡。惟簿不脩。親愛佞人。是訖禍發自蕭牆之內。不亦宜乎。乃者書賈子翁軒。揣刻又徵子著編。子意

在前條。即便編次興隆二起事蹟。及美惡少。求列傳以塞責。皆是寓言。訖勸懲。意近類。似唐山小說。寓言小說。君子不取也。譬之春華驪目。觀華銷日。寔無益也。然可醫鬱遺悶焉。是書亦齋然。君子訖此破獨坐睡魔。蒙昧以此為迷津一筏。則勝於不見之歟。本輯書賈又求序。炳管之際。思出于此。遂長文政十一車暢月之吉。曲亭蟬史撰。雲不道人書。

雲不道人書



近世說美少年録第一輯摠目錄

第一輯五卷  
 第一輯五卷  
 第一輯五卷

卷第一

第一回

驚吐水 火懲 古廟  
 拒諫 管領 陣古廟  
 脫窮厄 弘元 宿漁家  
 辨理 亂它 六資 後士

卷第二

第二回

突賊 義興 遺福 胎  
 燒蛇 穴 義興 遺福 胎  
 御廟 野興 房遇 阿夏  
 鴨河 原 兩情 結春 夢

卷第三

第三回

綠巽 亭蛇 孽馮 胎  
 千本 珍兒 徒喪 命  
 美使 茶店 傳貴 翰  
 美婦 携子 送情 人

卷第四

第七回

一 二 妻 賊 忍 恥 從 兩 警  
 神僧 詠歌 示 解 脫  
 阿夏 定計 雪 舊 怨

卷第五

第九回

美王 做 收 留 孤 容  
 駿馬 臨流 全母子  
 關帝 廟 少年 結義  
 福富 邨 幼女 惜別

起正六年 盡大永二年  
 年序大約係于一十四年

第一輯摠目錄



五子妹  
 後  
 己の身  
 田  
 田

五子妹  
 後  
 己の身

五子妹

後

後

田

田



須問炊黍  
 未殫  
 數雖  
 依汝  
 禍福  
 肩功勿驕

田  
 田

備中

大内

後

田

田

笠屋夏



美哉瀬十

郎

避雨遇歌

妓

蛇孽有縁

胎  
遂生彼虎  
咒

陶瀬十郎

像替第三

谷河平

乃不里也

老之及

落羊魚

かほろくろく

まをさる乃山

普胎堂

小夏

末松木偶双

像替第四



喪家狂犬網裏  
 惡魚以毒征毒  
 天刑妙歟



十之鬼夜行太

野千五黒三

像替第五

田高景市



うほそを  
 夢子抄巻を  
 中らるる  
 かなし  
 みる  
 あさなり  
 中子



積鳥齋



近世説美少年録第一輯卷之一  
近屬院本雜劇載美少年一稱其の極雅愛護衆之誠古  
三ると類過はるるは眉目之美少く古来の美少年は其の醜  
對惡の善の偶然れば世に美少年あると云り又惡少年あると云はば且その美  
るも眉目の美あり又稟性の美あり惡も亦相貌の醜惡あり心術の醜惡あり  
かれ容貌の美麗と云ふもその性毒惡なるもの惡少年と云ふも又容止を  
醜一ともその性の美と云ふもの美少年とこれをいふ況性と容止と共其善美なる  
この是直の美少年なるもより其の書名の如く其の貌の美あり性と性美なるも少年  
の傳を作りて後性と容止と美なる少年傳をいふ言と其書則美美ありと云  
醜惡なることなるの美ありて書名所云美少年の末松就鳥津日高等の少年の  
事小似くそののめあはる作者の用心敷輯を累て漸々而て見るるを其の直  
所まで云ふ程の看官の感心なるを聊か其の自性を整へてこの書に書するを免

近世説美少年録第一輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第一回 諫を拒ぐ管領古廟陣を

此を驚て水火驕將を懲む  
聞道往昔惠林院足利義種御將軍重任の時周防長門  
豊前筑前安藝石見山城七箇國の守護をける大内左京權大夫三々  
良義貞も興復の功ありて先代例もあらず管領職は補せられその  
身京師小在りて執權政勢一家は歸りて威勢高く時死る時永正六  
年己巳の春の比南朝の大將菊池武政が嫡男肥後守武朝が殘黨の  
菊池肥後太郎武俊と喚ぶもの先亡の餘類を鳩めく肥後國阿蘇郡阿蘇  
山の古城を盾籠て近御鄰郡を亂妨して益々其威を振ふ鎮西の守護

大伴親春太宰少貳木が進らせり急脚遞の使者既小京師に到着し具  
 注進せりけは是より室町殿史前管領高國新管領義興島山尾張入道  
 ト山辺江判官高頼木の諸老臣と前召召合々群議を凝しぬけり時小  
 島山尾張入道ト山進少く稟にさう蒲池の元弘建武年間入道寂阿宮方々  
 後醍醐天皇の爲に戦死せりより武光武政に至るまで南朝を随後し下  
 たひもその志を殺さば鎮西數箇國を横領しと犄角の勢ひを張られも南北西  
 朝を和睦ありしより渠が前衰へり然れども時方で先將軍鹿苑院  
 義満公菊池武政を征伐の爲に數方の精兵を將く九州に御下向の武  
 政路次に出逆せり要時の防戦すものる処々の支城を攻落され降参するの  
 事有りければ終より折れ勢究せせん御の爲に隨は旗を卷れ脱死阿谷々々と  
 御陣を参り陳謝の辭を盡せり即便寛仁の御沙汰をりく和順の御を

御許容あり肥後半國を賜りて馳せ凱陣をしけり然りければ武政を  
 不野心を改めむ一味の武士も彼此に城々を籠居り動をせざらん下参  
 後参るとより有右程小武政は老病を犯され終り身するたり後子武  
 朝も陣殺し子孫民間に落魄せり家終に絶るより人なるを知らるもの  
 る一粵は年紀を傳ふに彼武俊の武政が孫武朝が子なるべし祖の武勇を  
 継んとく絶て古城を寓るとのふともいふるにありのるを彼地の武ま  
 交を懐きの走集りて更勢ふる由々敷大事にゆき火滅せり敵を成  
 奈何兩葉めく断されり斧を用ひの患ありを討むの軍將として誅伐せめ  
 らるる勿論いへりといひ傍をえられ義興自荒尔とち笑く現微妙といひ  
 是下りる去歳の冬小夜深き御所を盜賊の入りしと宿直の近臣尋らねば  
 我君おんをたるとせむるひく賊徒を研伏し程は九ヶ所を瘡を肩せぬと幸ひ

志く恙なく日るるに平愈すしとて件の賊亦遺る當坐伏誅とけし。本人定まる所も今更だ武俊が刺客も知るべからず。張を討め大将の任は勝るもの。擇まざるもの。願くそは。衆皆諾る。其ホグ。思ふもその外にゆくと。志御氣色を伺ひ義植頻りに領をひく。然る討めの大將を甲乙と擇む。及び當管領左京北をひく。中四七州の大諸侯。其志く且武略あり大功空からざる。世の人の知所逆徒追討の惣大将。京北をひく。誰か。今と政務暇る身。大義も。大義も。周防の立るる。近國の躬方を駈催。一奉。孤城を攻落。武俊が首を獲。と更。踵を旋。ま。偏。頼む。と他事。仰。義。與。推。辭。由。り。畏。る。も。稟。け。有。斯。而。次。の。日。義。與。將。軍。の。お。ん。旗。と。軍。兵。催。促。の。御。教。書。を。の。り。猛。小。歸。國。の。准。備。と。整。へ。隊。兵。三。千。餘。騎。を。將。く。京。師。を。出。く。

草枕旅路。幾日。在。明。の。月。毛。の。駒。も。西。天。も。く。て。只。官。急。死。し。如。月。の。下。瀨。周。防。州。吉。敷。郡。山。口。の。城。は。の。り。の。御。教。書。を。の。り。筑。紫。の。御。方。の。武。志。を。催。促。せ。し。西。國。の。大。小。名。大。伴。備。前。守。親。春。太。宰。新。小。貳。教。頼。原。田。山。鹿。宇。佐。千。手。宗。像。酒。殿。立。石。等。各。々。隊。兵。を。引。率。し。日。を。去。來。會。ま。く。け。れ。義。與。が。七。州。の。士。率。と。共。五。万。餘。騎。肥。後。國。小。推。寄。阿。蘇。山。道。を。の。り。た。り。是。より。先。小。義。與。と。西。箇。の。間。諜。者。を。の。り。敵。の。分。野。を。撈。ら。せ。し。者。躬。く。か。り。ま。り。阿。蘇。山。の。古。城。は。籠。る。賊。徒。一。千。餘。二。千。の。過。は。ら。せ。る。武。俊。後。此。も。怕。る。氣。色。を。敵。推。寄。一。箭。射。し。と。鏃。を。磨。り。防。戦。の。准。備。暇。を。く。と。報。を。義。與。に。傳。へ。し。原。來。出。し。し。の。似。ら。け。り。武。俊。武。勇。の。癖。者。も。と。も。纒。小。島。合。の。兵。り。京。軍。數。万。の。精。兵。と。雌。雄。を。争。ん。と。欲。ま。る。被。精。備。を。海。填。め。蟻。螂。が。谷。を。の。り。車。小。逆。は。異。る。賊。小。勢。の。附。ぬ。間。小。大。軍。山。の。三。方。を。

攻登り踏潰さへゆられ長途の疲勞もあへり。今宵は是首小人馬と懸へ曉を  
 齊一俟んとし。躬方の諸陣小御示り阿蘇沼の畔る靈蛇の神社と懸りて  
 本陣を志すける不題安藝州高安郡治比の郷の人氏小備中又大江弘元と  
 いふ武士ありけり。遠くその祖を原も鎌倉の將軍頼朝卿の時政所の別當り  
 前陸奥守大江廣元の四男安藝入秀元十一代の衣筒孫なり。寔は名たる世  
 家されども純小千貫の御士あり大内氏の隊に属され。這回義直の備後後  
 主後夫の陣中もあり弘元文武の才長く且嚴嶋を辨才天を年来の信者なり  
 ければ今義直が阿蘇沼の靈蛇の神社を本陣せしめ下知をせしめ諫るやう  
 當社の菊池武光が時初この地小建立して嚴嶋の神を合祭すより靈驗筑  
 此を隠れるる其曾故老の物語を傳ひし。初武光阿蘇山小城郭を執立ん  
 とく。屢繩張美れども彼山の麓に阿蘇の神の祟あり山小硫黄燃出く。

常小煙の絶ぎると信濃の浅間嶽日向の霧嶋山と相似る。故武光が欲  
 せ城の硫黄の爲に幾回とく焼崩され成就せしめり。困り果て  
 誰れもあれ彼城の繩張とく定めく落成せむりのあり賞禄へ乞ふ依りべと  
 送る限る御さけ有斯程は同岡山鹿郡木山村小浮水と喚ぶ媪ありけり。故郷の  
 安藝の廣嶋中く最もも宮嶋を辨才天を信する。大に過されも過世す  
 くて良人後れ獨子。先そより多き身とる。此の由縁を心當小件の郎小  
 流れ来る日毎小木山川は下々人の被替せて衣を洗ふを生活ゆとる。有一日彼  
 川の上あくいと大なる一箇の卵の草上蓋蔭小ありける。心とる。拾ひて宿誓を  
 以り草桶を綿を布きとる。その内小斂親を既小日る。慶應は件の卵小自然と  
 破れく一箇の赤子の生れたり。あえはとも覺れ。且駭且憐とく。七字育む  
 程は純は半年許あり。その子の大なる。七八歳の童子。優りあり。隣

村近御塚を隔し田舎まで傳つた事にて日々觀るの者如く原曼郎の中より  
 多く生出る子とありければ玉五郎と名づけり俚語に卵を割け玉子と名づけり  
 遠く唐山の故事と必す帝學の少妃簡狄の春玄鳥の卵を吞く契を生ずとの事  
 此れを倍々怪しと村学究の吟詠を浮木ハ物も必すうき肩蒸し情を感  
 する玉五郎ハ浮木ハいさう過世ありてあかきまふ養育の恩いと高き何ぞと報へ死  
 傳つた菊地殿ハ阿蘇山の城成就せんと彼山繩張りと落成せむはわが  
 賞祿ハ請ふよとと徇られるはたやこれの支をよまぬか身居る賞財成  
 獲て一期を優送のめまづる由と訴へてやとと急まふ浮木の媪ハ今ハ心  
 のとくも要ありと思ひつゝ菊地ハ城ハ赴け云々と訴ふる武光ハ亦疑ふ益  
 るらんと思ふめら媪ハ月より養ふるを子玉五郎の怪談と傳つるもあはれ且  
 試み小請ふは任して功成ら形如く賞祿を取せんといひあはれ浮木の媪ハ宿

所退り玉五郎ハ首尾と報ふ然るに灰を震小袋を携ふ共阿蘇山  
 赴く急せめと杖掖と郡と隔路の程と只日小走り昔を高峰さへる  
 易らげ浮木を脊肩で攀渉る疾は馬も如く有之而山巔小近はく  
 随小玉五郎ハ山の喜煙と借と瞻仰く要時咒文と唱る程ハ惟む昔より  
 一日ハ絶岫の猛火の立地ハ滅失せ煙もたなすまけり登時玉五郎ハ浮木の媪を  
 抱へておん身ハ慈善の入るれも前世の悪報ゆへ所天と喪ひ子を先ぞく孤獨の  
 老女とありありこれ業因をき彈く餘命安楽のまを死と神佛小擬  
 せられ永く祀らる徳ありけふまでも尚あまを思ふおん身ハわが壽永の比鎮  
 西のその名皆え尾形三郎惟義ハ庶流の末孫る尾形の大蛇の子孫との戦大太の  
 因と引くおん身ハこれを字育り又辨天を信するも因縁なまはる親子の契  
 ても是まで今より長く別るも本形を顯すも必し怖れぬをこがれ速る後小



石丸木



玉五郎

阿蘇城郭成白蛇

出像第一

跟く。裏の灰を揮布多る。あつちの地無事成人。死身のあまの城郭と成就せむ。  
ひのちえ阿蘇の社頭。神泉をけり。のせと極木野の向。廣野をけり。彼神  
これを進ませ。これの邊に栖んと欲す。のくといひて。身を翻せ。隨ふ。海女の  
白蛇と變り。山の平畑。嶮畑。後の伸の屈。あ政。うけ。豫て期し。夏なまこり  
浮木の戦。曾を鎮め。教誨のぞ。跡。跟く。推。方。の。臺。裏の灰を彼。此と散  
布く。大蛇の涎沫の粘。著。けん。灰の地上。凍。さ。似。く。後。も。ま。も。耗。さ。り。け。り。  
既。も。あ。く。城郭の繩。張。早。み。成。り。白蛇の浮木。を。さ。る。く。別。を。告。面。色。あ。り。忽  
然。ど。と。雲。を。起。麓。の。方。に。飛。去。く。野。中。の。古。井。入。る。ま。ま。を。け。る。の。井。の。四。下。半  
町。大。地。陷。り。沼。と。り。く。の。深。を。測。る。べ。く。形。様。琵琶の似。れ。て。く。里。人。琵琶の  
沼。と。唱。へ。又。阿蘇沼。とも。喚。ぶ。然。程。ま。地。武。光。の。浮。木。を。再。度。の。訓。ま。り。て  
靈蛇の奇特を感悟。く。その。驚。張。を。後。ひ。く。阿蘇山。城。を。造。る。は。麓。の。神。の

祟もる。山の煙。さ。絶。ま。けれ。の。の。隨。成。就。せ。り。武。光。既。も。想。念。口。足。り。て。浮。木。の  
媪。あ。り。十。町。の。良。田。と。沙。金。千。兩。を。取。り。せ。り。浮。木。の。口。の。金。を。受。く。田。圃。の。辭。ひ。く  
れ。を。受。む。金。五。郎。長。預。措。く。貧。者。の。れ。を。施。し。或。の。里。の。路。を。造。り。橋。造。り  
る。ま。る。程。は。三。稔。及。び。く。の。金。の。餘。ゆ。く。ま。り。比。浮。木。の。病。苦。覺。む。と。腫。れ。が  
ど。く。身。ま。る。り。け。り。登。時。郎。長。の。里。人。木。と。相。計。の。遠。く。浮。木。が。亡。骸。を。阿蘇沼。の  
ほとり。に。花。寺。の。邊。に。財。を。り。く。神。を。齊。祭。禊。舎。を。建。く。浮。木。の。辨。天。と。稱。へ。り。  
是。より。武。光。の。戦。ふ。毎。日。必。利。あり。肥。前。肥。後。日。向。大。隅。薩。摩。の。盡。外。を。討  
後。へ。威。を。西。海。に。振。え。靈蛇の擁護。る。べ。く。阿蘇沼。の。畔。に。靈蛇の社。を  
建。立。し。巖。嶋。の。辨。才。天。を。合。し。祭。り。浮。木。の。禊。舎。を。末。社。と。し。て。の。子。武。政。が  
時。ま。も。年。毎。の。祭。礼。懈。ら。ず。く。奇。蹟。壯。観。の。阿蘇の。神。社。優。る。と。あ。り。  
登。り。の。を。さ。り。武。政。が。見。孫。不。至。く。神。を。敬。ふ。心。を。神。社。の。頰。破。及。べ。ども

修復を加ふるにせしめられぬ。彼家遂に衰へて零落する。その比の山に燃  
出く煙の立ち上る如く。先蹤の霊蛇の神社を陣陣にまきこむ。難  
兵の乱妨を制し、あやむいふを祈願せしめ及ぶ。御陣を他所に移して  
敬神の美を表し、忽然と神の憎みよ迫る。後悔のやゆくと、故事を逆理を  
盡し、潜す論。たの諫言の耳は逆ひ良茶の口は苦しとの譬ふ漏れぬ義  
興の頭を左右にち掉りて、大江殿の先祖より和漢の故実を諳く。文武の  
達者といふ。似びる死を穿く。の多菊池が大蛇を出宗の愚民を惑はし奸計  
るのけん。もとのあつもの。毒蛇の虫の類。これを靈あるもの。とも神とて祭  
る。淫祠るふ。淫祠の民は害ある。賢言信吏の必毀て。然るを其その  
議及ぶ。本陣はあつもの。彼早蠅鳴。邪神の僥幸とのまくの。正る死を  
喋々く人を惑はし。と。辨尖鋭く。害めく。後ふ。も。あ。弘えぬ。び

諫めむ。身の陣所を退れ。も。鬱鬱とて。と。樂。う。ね。ひ。と。を。く。と。あ。大内  
氏の七ヶ國を領する。す。ら。分。過。た。る。果。報。と。の。あ。例。も。は。管。領。ま。り。升  
り。よう。權威を員。と。諫。を。拒。横。紙。を。破。る。と。た。を。た。け。れ。這。回。の。軍。功  
あ。の。も。久。後。の。あ。死。と。知。を。催。促。後。ひ。ぬ。を。悔。し。け。れ。と。あ。ら。は。る。  
今。あ。ら。ま。の。甲。斐。と。と。る。の。け。り。有。右。而。日。暮。れ。雨。降。を。夜。の。丑。三。と。あ。り。れ。  
比。疾。風。颯。と。わ。り。来。く。阿。蘇。沼。に。集。る。水。鳥。の。群。立。騒。ぐ。汀。渚。の。陣。小。籠。兵  
ホ。が。焼。捨。つ。る。篝。火。と。み。る。滅。果。と。る。寄。る。の。軍。兵。の。物。音。日。は。覺。え。驚。散  
動。に。原。来。夜。討。の。入。る。あ。あ。ん。出。る。御。旗。と。呼。ぶ。騎。馬。武。者。の。鞍。馬。は。鞭。を  
揚。ぐ。焦。燥。も。あ。り。士。卒。の。笠。前。を。ま。か。ひ。ら。と。手。ひ。或。の。鎗。長。刀。を。逆。ま。り。校。之。會。後  
れ。と。陣。門。を。走。り。ぬ。く。四。下。を。ん。敵。あ。ら。漫。々。る。阿。蘇。沼。の。水。師。立。て。岸。小  
溢。れ。陸。を。浸。む。沼。水。猛。突。衝。し。人。馬。の。足。を。拂。ひ。勢。力。以。當。る。べ。し。の。あ。あ。あ。



諸陣齊一避易き。矢庭は瀕死するもの。いづく工を志すに幸と脱る  
もの。其前を流し器械を失ひ圍をこぎ登らんとする。如法暗夜の  
あれ。東西も辨へ主の溺るれども家隸の力を極す。由る父と兄の流されても  
この留んとる子弟もあらを瞬間の水岬の常小のあふる。有阿蘇  
沼の其処もろく吉田楠木野の是方より阿蘇山の麓まで大湖のわたり  
けり。有是けれども摠大将義興をゆえ大伴太宰の餘の諸おも辛く水厄成  
免れ。走退くと一里許小却死知取程。天の朗々と明あがり。自ら幕を大ひ  
甲曹を脱捨し。今ゆる絆を缺のまわら兵糧を出水に取れ。大将も士卒も  
饑餓臨まぬのさけれ。義興即近御下知。糧を送らせ。又阿蘇宮の大  
宮司の兵糧を催促し。稍口腹を艱。備の敵無く。敵逆寄せ。い  
せん抑彼沼の水大く溢れ。うう大水及び。靈蛇の出する。死然と螺

脱る。いふ山崩れ。やあふらん。攻め城へ。寄もせ。御方を喪。喪れ世の胡慮  
るらん。左も右も。軍果敢と。いひのあつと。咳くもの。ヨリけけ  
かる騒。二兩日みる。徒過。第三日の夜。水小の。送り。落。故の  
陸地。義興誘。先陣後陣と。部を定め。名。高峰の麓  
路より阿蘇山深く。攻登り。関を吐。賜。早雄の杜。武者ホ。と。浅間。敗  
城の前門より。後門より。堀を踰。城戸を破。先陣齊一攻。その甲斐。あら  
む。何の程。小落。亡。けん敵一人。も。身。甚。と。小。疑。感。立。在  
折。武。後。木。が。落。ると。死。あ。らの。地。中。機。関。り。措。けん。忽。地。山。も。烈。る。如。く。足  
下。に。落。る。地。雷。火。は。敷。も。仆。され。身。を。燔。ま。吐。嗟。と。騒。ぐ。大。叫。喚。あ。ら。山。小  
硫。黄。の。氣。あ。れ。四。方。八。面。猛。火。と。り。城。の。櫓。も。燃。移。る。敵。を。避。け。建。た。れ。城  
戸。より。内。小。攻。入。る。士。卒。は。四。五。百。名。一。箇。も。脱。る。の。ろ。く。灰。燼。と。なり。く

亡しける。惣大将義貞と城を距る。七七八町程と丸山路の馬を立く。士卒を將大  
進。折る件。緯の為。体小。敬篤くと大々。崩れ立。諸軍勢。小。巖を突れ。推  
推。戻され。鹿を鹿。退。太息。吻て。又。彼地雷火。山。硫黄。稔  
稔。り。けん。峯。上。頻。り。鳴。動。多。菊。地。を。城。の。一。宇。も。残。り。石。垣。を。焼。碎。け。く。  
煙。の。年。を。麻。呂。ま。も。立。升。り。絶。ぎ。り。け。この。日。陣。中。の。衆。評。は。賊。の。あ。れ。武。俊。を  
寡。も。く。衆。は。敵。の。死。始。終。を。掃。て。落。亡。る。空。城。の。地雷。火。を。送。り。置。く。の。智  
る。の。現。鋒。を。ま。く。ま。く。殺。の。敵。を。殺。せ。り。唐。山。の。常。言。は。彼。死。せ。り。孔。明。が。活。は  
仲。達。を。走。せ。り。の。も。優。を。計。畧。然。あ。る。と。潜。め。て。これ。を。忘。る。雜。兵。の。善  
悪。の。言。を。洩。す。く。も。義。貞。以。て。面。を。収。め。て。丸。鹿。の。阿。蘇。谷。を。屯。り。  
心。の。鬱。悶。を。慰。ん。と。身。辺。の。兵。を。お。も。く。大。宮。司。の。宿。所。に。赴。け。り。當。下。阿。蘇。の。大  
宮。司。の。出。迎。へ。席。を。儲。て。茶。を。薦。め。果。子。を。羞。め。軍。旅。の。疲。勞。を。同。慰。す。款。待。等。閑

る。これ。の。義。貞。感。謝。は。堪。び。く。這。回。武。俊。追。討。の。大。將。を。奉。り。勞。功。  
二。死。貞。の。顛。末。を。さ。り。け。水。火。の。為。は。ヨ。ク。士。卒。を。喪。ひ。る。為。體。を。示。し。彼  
沼。水。の。漏。出。く。里。を。浸。せ。り。例。や。も。空。城。の。地。中。より。猛。火。忽。然。と。發。り。武  
俊。が。豫。く。巧。く。地雷。火。の。所。を。多。く。當。彼。水。の。出。没。の。所。を。お。も。く。大。宮  
司。頭。を。傾。け。り。家。の。遠。祖。より。當。社。に。仕。な。り。て。位。高。く。職。重。く。不。肖。の。某。至。る  
ま。も。舊。記。を。相。傳。き。れ。ど。沼。水。の。漏。出。く。人。馬。を。害。す。の。所。の。彼。の。所。を。  
上古。より。阿。蘇。山。の。麓。に。ま。く。湖。水。を。く。山。湖。中。に。あり。我。阿。蘇。の。神。往。古。幽。造  
る。時。西。る。山。を。穿。通。し。て。水。を。落。し。湖。を。乾。す。遂。に。田。圃。を。多。く。世。々。に。碑。  
傳。へ。り。有。斯。の。件。の。沼。の。四。下。に。わ。り。の。湖。水。の。跡。を。出。水。し。り。又。阿。蘇。山。の  
古城。より。火。の。燃。出。り。地雷。火。を。お。も。く。硫。黄。火。の。燒。拔。す。飲。ま。る。と。本  
山。の。燃。る。と。往。古。より。一。所。の。近。屬。の。法。性。崎。と。北。と。中。の。阿。蘇。の。阿。蘇。の。煙。を

阿蘇山

弁入芥介の神山も、菊池氏の精忠を神と仰ぎ、いそがしき時、至る。山の煙の絶へ、城郭を焼く。執事、うけて子孫の衰微、及び又硫黄火、燃出、煙絶、世の運命、這回城を焼く。神所行、欲測る、世運、近世南北朝と別れる。一統の今、至るまで、千七百、兵革、年々、増、當社、數、方、貫、の、神、田、九、夫、の、為、に、横、領、せ、れ、神、社、の、類、破、及、び、後、世、に、死、便、著、者、も、あ、ら、う、流、李、の、世、に、あ、れ、も、神、威、の、今、も、衰、へ、る、山、の、名、を、當、四、司、の、奇、異、事、の、言、を、あ、ら、う、君、が、方、小、劔、ら、う、武、後、を、追、走、し、城、を、焼、く、の、神、慮、は、稱、せ、る、の、功、を、と、り、あ、ら、う、思、ひ、屈、し、を、慰、め、れ、義、兵、を、い、と、應、じ、心、地、に、阿、蘇、の、社、を、參、詣、し、白、銀、幾、枚、を、南、宮、大、宮、司、に、別、れ、を、言、ふ、躬、を、本、陣、に、立、死、し、兵、の、自、數、を、檢、する、水、は、滿、れ、の、千、餘、人、を、殺、れ、も、勲、功、は、皆、是、士、卒、の、一、陣、將、の、死、を、と、り、あ、ら、う、彼、

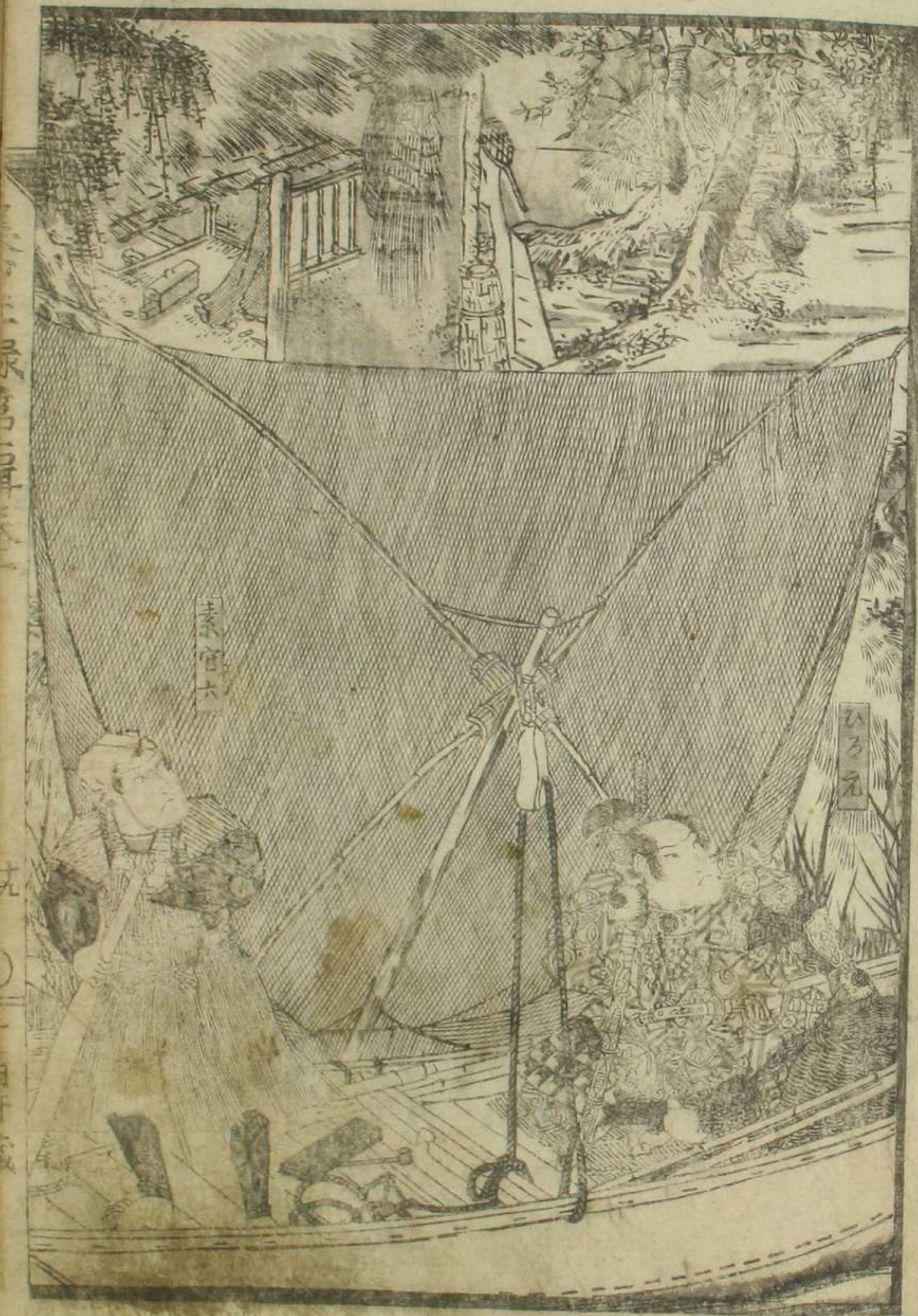
弘元主後の一箇も送るのまければ、今の世も稀る。博識者と云え、彼折終、脱れ、死命運、ふて、あ、ら、う、人、を、憐、れ、を、惜、ま、け、り。

第二回 窮厄を脱れ、弘元、渙、家、に、宿、る、理、乱、を、辨、し、く、它、六、俊、士、を、資、す、

再說、備、中、弘、元、の、當、夜、沼、上、の、陣、に、あ、り、の、故、に、出、水、の、為、に、ち、を、推、流、され、せん、樹、の、ま、り、の、時、も、あ、ら、う、利、と、臂、近、く、浮、揚、す、肩、を、極、と、し、胸、小、當、り、且、く、の、洞、が、く、も、水、勢、の、湊、り、身、之、心、も、疲、勞、果、く、流、れ、ゆ、く、正、幾、町、を、と、り、命、根、今、や、絶、る、と、思、ひ、の、う、ら、う、年、來、信、を、辨、才、天、を、念、ま、す、程、は、年、ぬ、り、たる、樹、の、大、枝、も、あ、ら、う、流、れ、截、ま、れ、携、著、死、息、を、吻、く、猶、も、木、枝、小、攀、登、り、覺、束、る、も、曉、る、を、俟、ま、る、明、く、下、り、兩、歌、く、水、の、大、と、落、ち、け、る、浩、処、は、一、箇、の、漢、子、柿、染、の、袴、の、衣、の、腰、裳、を、著、る、か、平、駄、船、を、ち、乘、り、船、を、推、

立く。漕舟をまよけり。船中奥四の綱あり。昨夜の水と物とも思つて漁獲よし。
 なる所へ。弘元これをきこり。海月の骨まある心持して。やま舟人を救へ。これを救
 と叫ぶ。まん彼人遙まうち向上く。あま甚麽をきり。水と怖れ。樹は緑まある。昨
 々の水の陸も川も。ひらあまうたれども。あらう人身長の届る。今朝の大。
 れの歩行より。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 梢より。携降く。後さる。舟乗程を。漁者のえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 高かり。秋山より。里へ流され。あらうゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 量せらる。吾の管領。麾下の武士。備中。大江。と喚。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 へ。寄せ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 夜の水。陣所を。喪ひ。小勢。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。

あらう。齊一。水。溺れ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 露命を。敷。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 何と。喚。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 秋。彼。処。の。湿地。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 去。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 処。の。陸。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 川。脈。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 あらう。高。木。林。川。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 合。志。菊。地。山。鹿。玉。名。飽。田。の。六。郡。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 分。れ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。
 所。の。遠。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。ゆがたえ。



美八の舟子

出像

るけれと一両日休らひて寛きよ還さるる。河蘇の水も波落つて、  
るらん。急ぎの要るは、ふとよふ。馮心く慰め、人の誠は弘元ハ、  
あく頻りの感と己のけり。又漢者の鱗、声をけく。漕ぐ程、定ふ川、  
頭まで十町、わたり川下、只その水の濁るる。三常に、  
宿所のほとり、船を、  
ま、案内を、  
向の頭、  
た、  
大爺を、  
と、  
あ、

地と措く立働、  
さ、  
更不堪、  
と、  
要時、  
り、  
ま、  
善、  
塩、  
剥、

洗濯著も時あ春の松漬の君が為の野まを摘採ある世物の敷み向より添  
 いそそく馳くりて出く恭しく安排の夫婦右より左よりと食も入と屋を弘元  
 餓く辞もあ及びびを速著と揚く。其の随いたるべし快然と愉く遂に  
 睡眠を催しけり。登時あつた忙しく女房を呼立く。綾女よ大爺の臥簾を儲く些  
 休をさるあせよ。まの通宵樹の杖の足踏掛くとせし。お疲勞の理り。よこ  
 るとのそを弘元急推禁めり。あも甚麼日の尚高を今より臥簾をさる  
 れんや。と推辞とあつた。宿も旅宿とあつた。誰の憚りのあつた。あ程の  
 覚しえ納戸のあつた。狭けれど南面で温暖の柱と且く睡らせぬとあつた。  
 辞ひし。弘元引く。儘に納戸のあつた。時寝の就くとあつた。これあも  
 あつた。熟睡し。その日も既暮果く子二刻の左側ひより覚けり。枕邊の措き  
 たる燈火の光幽ゆくあつた。夫婦の寝るのけん寂寞とく音もせぬ。噫鈍くや

これらから昔春もあつた。あつた。寐る。浄とせんと。と身を起し。晝に隨て心當  
 竹縁を搔撈おれ。背門のうま馬嘶く。人野相譚声の遠くもあつた。竹  
 けり弘元耳を敵く。肚裏あつた。田家の多く小荷駄あれども。あつた。川添の孤屋  
 中へ漁獵し。世を渡れ。素より馬を養ふべくもあつた。加梅小夜深で背門備  
 人の聚合。怪しむ。あつた。あつた。あつた。盗賊の頭領のあつた。あつた。あつた。  
 足えねども。親をり。人の心の善悪の定め難く用心する。優のあつた。と深念を  
 あつた。臥簾のあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 出れ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 竹縁。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 緑のあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
 早飯を差めり。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

退け。あつたの漢子の身邊途く侍りく。江湖上の雑談の姑く時を殺す。弘元と又あつた對ひく。この大く疲労のけん目の暮を著知ふ。半日一夜。孰れ睡せし。これら。鈍ま。うら。い。か。何と。あ。ん。疑ふ。似。れ。も。あ。ら。わ。川。添。の。孤。屋。あ。く。鄰。家。あ。り。と。り。を。さ。る。昨。夜。真。夜。中。比。也。あ。ら。ん。背。門。の。馬。の。嘶。く。人の相譚。声。あ。る。と。い。ふ。あ。つ。た。微。笑。く。現。然。と。も。あ。つ。た。背。門。の。鱗。板。と。魚。網。を。藏。る。敗。小。屋。の。ひ。を。前。夜。の。貸。さ。れ。人。馬。の。声。の。あ。り。と。い。ふ。弘。元。の。領。死。あ。ら。わ。る。ぬ。が。死。面。色。あ。る。を。あ。つ。た。と。又。今。合。笑。く。只。今。具。の。告。す。う。ゆ。と。と。遠。ら。ら。む。く。あ。つ。た。時。の。せ。あ。つ。た。と。い。ふ。疑。ひ。の。あ。つ。た。と。い。ふ。弘。元。の。領。死。の。疑。ふ。死。一。河。の。流。も。他。生。の。縁。さ。の。危。窮。を。拯。れ。居。亭。儲。の。管。待。へ。身。を。終。は。す。と。忘。る。べ。く。後。報。ひ。を。受。ん。と。の。所。あ。ら。わ。つ。と。い。ふ。再。會。の。為。る。と。い。ふ。姓。名。を。告。ま。は。す。け。も。天。と。暗。れ。水。も。大。く。落。つ。ん。か。舊。の。陣。野。を。さ。る。と。管。領。の。

安不口を問へく。後率木の存亡の心も係りく不便。彼木が往方も安不口。と。い。ふ。あ。つ。た。沈。吟。と。現。縁。あ。れ。千。里。も。合。壁。縁。を。け。れ。肝。膽。胡。越。不。測。の。値。偶。ゆ。ゆ。有。敷。系。名。残。惜。け。れ。も。あ。つ。た。死。あ。ら。わ。つ。と。い。ふ。早。の。亭。午。の。比。も。あ。つ。た。と。い。ふ。不。慮。ふ。か。宿。の。仕。れ。ど。既。小。賢。察。志。あ。つ。た。賞。禄。も。あ。つ。た。望。一。から。む。素。素。あ。つ。た。匹。夫。で。ゆ。の。名。生。る。べ。死。名。の。あ。つ。た。と。い。ふ。在。下。残。子。自。素。宅。六。と。喚。做。し。妻。の。名。を。矮。女。と。い。ふ。子。共。も。夥。ゆ。ゆ。彼。此。へ。巢。立。し。今。の。宿。所。の。ひ。を。これ。ら。の。も。後。ら。み。つ。ら。時。得。り。あ。ら。わ。つ。と。い。ふ。漫。小。人。の。生。口。の。ひ。を。と。耳。に。示。せ。弘。元。の。死。を。親。を。更。め。く。い。つ。と。趣。を。あ。ら。わ。つ。と。い。ふ。和。主。を。生。れ。る。の。漢。者。の。あ。ら。わ。つ。と。い。ふ。時。に。遇。祇。一。葉。舟。を。選。て。蓑。笠。を。光。を。包。む。の。秋。吉。嘉。吉。應。仁。の。擾。乱。より。以。来。室。町。殿。の。武。威。行。在。諸。侯。あ。く。割。居。し。て。強。弱。の。必。弱。を。征。し。上。下。交。利。を。の。と。取。れ。る。を。の。權。を。あ。ら。わ。つ。と。い。ふ。



殺りて家臣のその主君を弑し子の親を害すも人ぞ不忠不孝とせしむる綱  
滅びて順逆の暗く五常絶えんとく骨肉仇となる偶志操ありのる官位  
あて言行まば果の群小は憎れく不測の罪に陥るのまろの和主の美を何と  
あふ教の他を更もく問れて素它六膝推進め言腐乱く父とも嘉吉忠に  
大乱の男色龍陽より禍萌して君驕臣奢る見は負の制度も成るるその  
故をいふゆゑに普廣院義教將軍のおん時め不覚の赤松貞村が男色を  
せむひく見は負の監賞あり一ひくは族満祐父子ゆく怨をなりの遂に義教  
公を弑しなり死あるを慈照院義政公も亦懲むまは赤松立彦則尚  
美少年をも恩祿の巾袖汰すく死ん父義教公の讎言るる満祐の甥をも  
うち忘れざるひけん當時好らぬ風聞あり山名宗全これらの事をも恨憤  
ま彦五郎則尚の詰腹を切らせる禍も胎あり福も基あり彼男色は監賞

ありしが亦応仁の乱根をのみ今山川殿新徳卿と疎せぬ御家督の更改  
より勝元宗全両驕臣の確執威勢を争ひ不起とのいへるを豈衛微  
董の禍を故のそらんむく北條義時が立重扈後小殺さすもこれ男色の嫉  
妬に起り近世戦國とより大將の士率も戰場どと家とまはれ男色を  
愛く妻妾不易く陣中の徒然を慰らほこの故に美童龍陽の歯を洗  
紅粉を施しく女子小彷彿すもまろの年二十四五までも額髪を  
剃らむく少年の面色をまはれやぐ今この世の風俗あり怪むりのあり  
やゆも縹葛倒小羅り冠履地を易るまろの縁故と原る小最も忍びと  
から等持院尊氏卿ゆも後醍醐天皇の寵恩を離言の復に南北朝両  
天子の御位争ひ小成り成り逆小取く逆小守とあひ餘映眼前小報ひ  
まろ直義直冬師直ホの逆乱小父子兄弟攻戦小家臣に主君を禁錮る

是よりと清氏直常氏清義弘謀反し君臣下刺上の戦ひ絶え錦  
倉管領諸國の領主も亦この如く終に嘉吉応仁の大乱あり極う便  
是汝も出く汝も返るのるを前轍履覆れども後車の誠を知むとこれと  
恨むを思ふ小を然る以て必死の志と辨せり論は弘元頻り嘆息して和  
主の寔小辯者へ彼卿食其魚仲連といふも加るるは下へ可憐れたせ  
のく釣綱は老朽より良主を擇む仕より然る汲引をせよと久し素宍  
六頭を掉ぐ在下仕官小望る一縦その望ありとも仇の爲に通られ夫婦が  
命運既小盡り後日をおすま違ふといふ弘元故馬をくそ安うらむるなり  
和主の仇の何れもこれ一臂の力を勤く救厄の恩に答ふ一隠む告よりのを  
と問もく素宍六嗟嘆小勝むを辱れしを大爺の仇を幾百人の助劍を  
ゆくりとも免れ果てたつ命あり是則命數るれ又奈何ともまざるは

この条の  
論義一  
部小説  
要領之  
結局は  
至る不  
ゆて分  
るる一

らこのも遠くを以て命のふとあらん在下夫婦と仇の爲に命果敢るなり  
ぬとも宛魂の生を易く必仇を復す一人の終焉の一念をく生を引くと公  
理の輪回も善人ぬ善人のく報ひ悪事ぬ悪のく報ひこれ亦自然の理なり  
かれ在下の後身も甚麼ものぬあるらん是も亦料り難かり詳小説  
と天機を漏まの怕れありみづから悟りぬとといふ弘元慰めり頭を  
低く黙然たり且くく素宍六と又弘元うち對ひく大爺の中州の舊家に  
多く且惻隱の心敦くとも信するも祈らるも神の擁護あり況く信心  
淺くは縁の今をわれ後小至りく必與るのあらん就く報せしを死一條あり  
這回阿蘇山の城攻へ一つの功もあるは管領の兵を六耦小羞く怒を起す  
とあつたその福誰か被るゝと志すねども未然の禍を避んぬその功を  
補ふべし就く當國山本郡飯田山の洞中へ川角頭太連盈といふ山賊あり



腰の草鞋の紐を締めてゆくわけが名残やとまろり小目送る夫婦の柴戸の隙と  
 正に需要時立在り却説備中弘元素陀六が宿所をゆくゆくこのとき  
 るらどそれ路備まら隊の軍兵三十餘名一人も恙なく馬を牽き兵器を横  
 佩く左右二側つのおれがあら甚麼と故馬に且勢ひ且怪三練の趣を語れど  
 衆皆齊一答さるる在下亦ら彼夜さる沼水のる推流され君の先途は  
 あひなきを浮り沈らそ折し誰とあらそ一箇の漢子快船を漕りて來り  
 在下亦らゆえ宛馬をも助け乗してそ宿所小漕之し扱潜す小亦ら  
 和殿亦且くあらあら主小再會さる勢ひあらん音るせと識めて背門を  
 小屋は容措ぢら生枯る草葉を二十餘枚取て來り和殿亦あらを  
 紙ら五六日の餓さる馬の紙らせとこのけりいと怪くちぢひらうと教の如  
 のせらる忽地心持清きめと今に至るまで餓を覚む書ハ疲勞く睡り甲

斐小昨夜の通霄のねられど相立小主君のあひなきのあつたに憑りて心  
 勇のせらるまらち相譚とひひ一扱又けいさの程あつたの女房が走來り  
 殿亦あらを竊小出り相距るこ二町許辰己のころる巷小あら主君小再會  
 ある一とくせよといひらる小欵一とて需要時あらを教小任一あらさる候なれ  
 果て違つて恙るれ自らをなすを嬉しけれと異口同立小報知するを弘元と  
 つとと驚らる忽地意中に悟り原來昨夜北月門のころ人馬の聲のせをい女  
 るる今知りぬれも彼演者素宅六小扱れと彼処に在り一緯の趣首をい  
 如此々々る尾の箇様々々と送るる説二小を衆皆彼ら呆るるまらば  
 疑ひの釋さけり登時弘元眉うち擡りたるゆも彼素宅六も素素是の  
 あは御ありと主従の危難を知りてさる船のく救ひけりぬる因縁あり  
 欲且治乱得失の理を論らる才学言下は頭れと耳新しく覺り茶菓を

りく主従小贈りく路次の割草小換る。その計ひ意外小出く凡夫のよきを  
後記あるまじく人を凍れ鯨言の爲ま。昨日夕の通りぬとひを思へ異類あり  
水泊水虎るとあやあらん。然るまの狐狸の種類放左も右もいと怪し。呼奇  
る所形と歎賞。後方遙小見えれば今も有ける川の方の白屋。迹も  
わく春の川風。うち靡く岸の柳のうづら小人を招く小似たり。従率  
ホとの光景小駭嘆と舌を吐れい。奇異の思ひを。中弘元  
さる。さる。さる。惟る。條の一奇異。よりや変化の所為。も。敬信  
空一のり。嚴嶋。辨才天の擁護利益と覚る。今何を疑ふ。念  
を。飯田山小赴。川角頓太連。盈を捕捕る。緊要を。故  
箇様々々と素。它六が贈。た。地圖を披。指。示。其。衆。皆。有。理。と。齊。一  
悟。り。歎。び。勇。ま。て。後。ひ。け。り。如。之。而。備。中。弘。元。の。件。の。馬。小。ち。跨。せ。三。十

餘名の従者を。飯田山へ赴く。彼茶草の奇特有りけん。人馬共。餓る  
と。氣。力。日。ろ。小。十。倍。と。長。途。を。れ。も。疲。勞。を。覺。む。阿。蘇。の。城。攻。の。期。小  
後。れ。と。思。ひ。此。も。休。ら。ぬ。宵。も。終。夜。急。死。す。幾。日。も。あ。る。既。ふ。を。件。の  
麓。小。著。ま。け。り。這。山。高。山。峯。を。る。糸。も。樹。木。森。林。と。七。谷。も。暗。く。鳥。路。能。徑。の  
外。小。路。も。存。れ。弘。元。の。復。地。圖。を。披。き。嶮。岨。方。位。を。分。別。し。心。利。一。箇。の。奴  
隷。を。樵。夫。の。貌。を。打。扮。し。潛。り。山。を。登。り。賊。の。巢。穴。を。張。る。半。日。可。小  
を。り。末。に。弘。元。小。報。る。件。の。川。角。連。盈。五。十。餘。名。の。小。賊。と。共。小。山。中  
を。洞。の。中。小。在。り。その。洞。の。と。廣。き。石。を。置。置。る。門。戸。あり。その。餘。の。為。体。の  
如此。々。と。仔細。小。注。進。し。ければ。弘。元。斜。る。を。殺。む。と。平。餘。名。我。二。隊。小  
計。策。を。其。示。し。前後。より。推。寄。る。弘。元。の。後。兵。十。餘。名。を。洞。の  
後。門。の。こ。小。赴。前。後。より。取。籠。て。一。箇。も。漏。さ。ず。と。計。ひ。表。並。不。題。川。角



○ 巢賊張漏不羅天え ○

ひろ元



川角さへ

出像



